

ロックな彼らの

恋模様

sample

valencia

ジェラシー

ドーム公演を交えた『PEAK』ツアーは、二度のブレイクを挟み、開始から一年近くを経過して終了した。途中、海外主要各都市へのプロモーションツアーや、アンプラグドツアーがあつたり、ヘッドライナーでのフェス公演があつたりと、多忙に多忙を極め、カラーレスは名実共にスターダムへのし上がっていることを実感出来た。

三日間連続で行われた地方ライブが終わり、ユウは疲労が溜まった身体を革張りのソファへ落とした。壁掛けのアナログ時計の針は、既に深夜零時を回っている。軽く咳払いをすると、喉の奥がひりついた。声帯が悲鳴を上げている。このまま一週間ぐらい一言も声を出したくないと思いながら、テーブルのボックスからアメリカンスピリットを摘まんで火を点ける。悪癖は百も承知だが、習慣はそう簡単に変えられるものではない。

スピーカーから印象的なギターフレーズが聞こえてくる。哀愁漂う重厚な音色は一聴してそれとわかる。唯一無二の美旋律に、来店客から大きな歓声があがった。

“ヘリオン”から“エレクトリック・アイ”。絶妙な移行。

名盤『SCREAMING FOR VENGEANCE』のオープニングだ。若い来店客達が酒を片手に盛り上がるホールの様子を、ユウはガラス張りのVIPルームから目を細めて眺めた。

「店内凄い活気ですね」

フルーツグラスに半分ほど残ったピンク色のカクテルを、上品に一口だけ流し込み、コースケがにっこり笑った。

こういう店へ来れば殆どのメンバーがビールを注文し、ユウも判で押したようにラガーばかり飲んでいるが、コースケはいつもカクテルだ。それもベリーニ、シーブリーズ、ピンクレディ……女のようにピンク色の液体ばかり選んでいる気がする。

「ハードロックバーだからな。皆、カラーレスよりはプリーストだろう」

ハードロックやヘヴィメタルはあまり趣味ではない。カラーレスはカテゴリーを定めず、ポップスからロックまで、作り手であるメンバーそれぞれの個性を尊重して、幅広い音楽の提供をバンドの方針としているが、それでもあまりハードなものはボツにするか書き直させている。実のところ、五人いるうちの二人のメンバーがハードロックファンだ。ギタリストという生き物は誰も、若いうちは尖った曲を弾きたがるものなのかもしれない。ユウはというと、ハードロックは好みではないものの、技術的に惹かれる要素が多く、流行りのアルバムぐらいは

だいたい押さえている。これもそのうちのひとつだ。

「シヨウさんまだ帰ってきませんね。喜びそうなのに。……どこまで買いに行っただろう」

そういえば煙草が切れたと言って来店早々席を立ってから、そろそろ二時間は経過する。セブンスターなどどこにでも売っているだろうに。

長身の男が二分だけ座っていたソファを、忌々しくユウは見つめた。ローテーブルのビールが、口もつけられぬまますっかり気が抜けている。

「向かいのホテルにでも、行ったんじゃねえの？」

VIPルームを出た直後、女に馴れ馴れしく腕を組まれていたシヨウの後ろ姿を思い出しながら、ユウは毒吐いた。見るからに香水や化粧品の強い匂いが漂ってきそうな下品な女だった。胸元や脚を露出させた煽情的なファツションと、細くて高いヒールの靴を不快な気分を思い出しながら、ユウは三杯目のラガーを一気に呷った。ぬるいし不味い。

「えっ、わざわざですか？ セブンスターなんて店の前にある自販機で買えると思うんですけど……売り切れてたのかなあ」

純粹なコースケがきよとんとした顔で言った。それどころか店内の自販機でも買えるし、煙草を取り扱っている日本の自販機や売り場で、セブンスターが買えない場所は概ねない。そもそも二時間も煙草を探して歩いている男など、そうそういない。どう考えても、目的がすり替わってどこかへしけ込んでいると、普通は気が付くだろうに、と呆れたが、ユウは突っ込む氣力を喪失していた。

ちなみに向かいのホテルは、あからさまなピンク色の照明が目に見え、名曲のタイトルを屋号にしているラブホテルで

ある。イーグルスに謝れと言いたい。

「お前はそのままできてくれよ」

目を細めながらユウが言うと、コースケが赤くなる。

「僕はずっと……」

コースケが僅かに身を乗り出し、何かを言いかけた。妙な雰

囲気に包まれ、ユウは思わず席を立つ。

「すぐ戻る」

アメリカンスピリットの箱を捻り潰しながら席を立つと、コースケが狼狽えている。

「あの……ユウさん……」

考え直して立ち止まり、入り口で振り返ると。

「コースケ、誕生日おめでとう」

言葉を継いでユウは部屋を出る。未だに頬へ幼さを残すコースケは顔を真っ赤に染めながら、口をぱくぱくさせていた。その様子を微笑ましいと感じつつ、誕生日の男を数分とはいえ部屋へ一人で残すことに良心が傷んだ。

「やべ……気持ち悪……」

うるさいほどの音楽は、アイアン・メイデンに変わっていた。流麗なツインギターとアタックの強いベースの疾走感溢れるギヤロップがこれでもかと興奮を煽る。まさにヘヴィメタルきつてのアンセム的な一曲だ。

腕を振り回しながら歌っている高校生ぐらいの少年は、もしかするとブルース・ディッキンソンのステージパフォーマンスを真似しているのだろうか。四、五人の男女が大声で彼を囃し

立っている。時刻は深夜になっており、地下鉄もそろそろ終電がなくなりそうだ。そもそもバーに高校生が出入りするのはずじゃないかと思ったが、常連客風のグループに彼が属しているということは、野球帽にハーフパンツという組み合わせの成人男性なのかもしれない。

ぼんやりとおせっかいな事を考えながら、「RESTROO M」という表示を探して、ホールの奥を目指す。そして突然、強い力でユウは肩を押さえられた。

「おいっ、何する……」

隣を見ると、二十歳ぐらいの男が、笑顔で自分の肩を抱いている。知らない顔だ。そのまま男に、ホールの中央へ連れて行かれそうになる。

選曲は、明るいハードロックナンバーである“ウイア・ノット・ゴナ・テイク・イット”に変わっていた。本日がブリテイッシュユ・ヘヴィメタル・デーというわけでもないらしいことがわかったのはいいが、それまでのハードな選曲では今一つ盛り上がれなかったのであろう、いくつかの女子グループもテーブルからフロア中央に出てきており、店内はほぼ総立ちのライブ

ハウスのような状態だ。

「お前なんなんだよっ……」

足を踏ん張り、抵抗するが、男はお構いなしにユウを捕らえたまま笑顔で歌っていた。

スピーカーの音量が大きすぎて、これでもプロのボーカリストであるユウの声が、簡単に掻き消されてしまう。

肩に回された腕をもぎ取ろうと苦戦していると。

「ごめんなさい、迷惑かけて……俺はこっちだ、間違えんなよ！」

男の友人らしき、青年が現れてユウに謝ってくれた。体格こそユウと似ているかも知れないが、髪型や服装のセンスがまるで違う。青年が男に「酔いすぎだ」と叱責していた。そしてユウを振り返ると。

「あれ、……君どこかで会ったことあるよね。ええと、何のラ イブだっけ……」

音楽バーならではの会話だろうか。ユウを一般の来店客と勘違いしているらしい。ここがハードロックバーであるせいか、VIPのゲストであり、国内音楽チャート上位常連のカラーレ

スがほぼ認知されていないことが面白いと感じ、彼らとの会話を少しぐらい楽しんでも良いかという気にさせられたが、何しろ今は体調が悪い。胃で不協和音を起こしているグラス三杯分のラガーを吐き出したくて仕方がない。

「悪いが、もう……」

未だに放してくれない肩の手を退けてほしくて、ユウが窮状を訴えようとすると。

「手を放せ」

あきらかに怒気を含んだ低い声が聞こえ、同時に強く反対側

の腕を引かれた。

そのまま大きく一步踏み出し、ユウは倒れそうになりながら、後方へ歩かされる。

酔っ払いの手は勢いで離れ、声をかけてきた二人は呆然とユウ達を見送った。

「おい、ちよつと……」

目指していたところと同じ場所へ入ると、そのままユウは個室へ押し込まれる。

膝が白い陶製の便器へぶつかり、ユウはバランスを崩して、奥の壁へ掌をついた。

自分を手荒に扱った男を振り返る。

「わざとらしいナンパに付き合おうなんて、意外と間抜けだな」

「その前に、なんで一緒に入ってくるんだ」

後ろ手にドアをロックした男、シヨウをユウは睨みつけた。

「俺は困っている人を助けたつもりなんだが、ご挨拶じゃない

か？ それとも……これから彼らとイイコトをしようと企んでいたのに、邪魔したか？」

長い腕が左右から回され、背後から体重をかけられる。百八十センチ近い上背に押し掛かれ、圧迫感からユウは壁に突いた腕一本で自分を支えなければ、膝から崩れ落ちそうだった。た。

「やめろ、何してっ……」

胸の辺りをまさぐる不埒な二つの手を、空いている手一つで払い除けようとするが、数の差と高まりつつある身体の熱のせ

いで、歯が立ちそうになかった。

何より不味いのは、胃が圧迫されることによる生理反応だ。

「何するかだなんて、本気で質問しているのか？　これでも俺は腹が立っているんだが」

「自分だってさつき……マジでやめろ、不味いって……」

耐えきれずその場で跪くと、ユウは便器へ胃の中身を嘔吐した。

ライブ前は朝から食事を摂らない為、幸い胃の中に固形物はなく、先ほどのラガーを吐くだけで終わったが、嘔吐すれば体

力が持つていかれる。しかも、外から圧迫されて吐かされれば余計に辛い。

腹立たしい思いでユウは水を流した。

「妊娠した？」

笑えない事を言うシヨウをユウは睨みつけた。

「ふざけんな……どれだけしんどいと思っただよ。……退いてくれ、口を濯ぎたい」

立ちあがり、棒のように突っ立っている男を動かそうとするが、逆にその腕を掴まれた。そして腰を引き寄せられ、やめろ、

と言う為に開いた口をいきなり塞がれる。口内を無造作に舌で舐めまわされ、窒息しそうだと思ったところで、漸くキスから解放された。

「……苦いし酸っぱい。煙草と胃酸かな」

「正解だろうけど、わかってんならやるんじゃないよ」

吐いた直後にディープキスをされて、気分は最悪だった。だが、当人にユウの非難は掠りもしない。

「そういえば、ちよつと身体が熱い。熱があるんじゃない？

やっぱり妊娠かな」

小首を傾げながら真面目な顔をしてシヨウが言う。本気か冗談か迷う口調だが、本気で言っているなら脳を解剖してやりたい。お互いそこそこ偏差値が高い大学で知り合い、シヨウの学部はさらに難関で、専門が違うとは言え、理系出身の男が言うのだから、何かしらの根拠があるかもしれないと、言われた側としては不安になるべきか、あるいは、発言者の正気を疑いたいところだが、間違いなくこの場合は後者の反応が正解だ。したがって妄言に付き合う義理はない。

「妊娠しねえし、笑えねえし、俺に熱があると思うなら、さっ

さと放してくれ。ホテルで寝るから」

ツアー中に体調を崩すことは珍しくないし、終了間際は大抵熱も出る。この日は誕生日のコースケをささやかにでも祝おうという主旨で付き合うことにしたのだ。それに最近バンド内は衝突が多い。その罪滅ぼしの意味もあった。ほとんどの原因をユウが作っていた自覚はあるものの、きっかけはシヨウにあった。

「ユウの子なら認知するけど……?」

「ちよ……やめっ。ざけんな」

耳に口を押し付けられながら低く囁かれ、ユウは背筋がゾク
リと震えた。そしてからかわれているだけだと理解して腹を立
てる。

腰をさらに引き寄せられ、股間を押し付けられる。脚の間の
モノが硬くなっていた。それがどれほど荒ぶって自分を翻弄す
るのか、ユウはいやになるほど知っていた。

「さんざんヤツてるし、男でもデキたっておかしくないだろう」
性質が悪い冗談をショウはしつこく続けた。空きっ腹に飲ん
だビールのせいか、あるいは体調のせいか、ユウの思考力は酷

く落ちており、セクシヤルなジョークで、意志とは反対に無理やり気分が高められる。

「どんな理屈だ……おかしいに決まってるだろうっ……って
いうか、いい加減にそのネタから離れるよ！ ……大体、さっ
きまでどこで何やってたんだ？ 今日コースケの誕生日だ
っていうのに、来るなり部屋を出たかと思うと、女と消えて…
…」

必死に冷静さを保とうと努めながらも、充分ヒステリックに
ユウが言い返すと、不意に身体を放された。

動揺して、ユウはおずおずと男を見上げる。

「なるほど」

甘く整った顔が笑わずに言う。

「な……なんだよ」

ユウは不安になった。

「やきもちか。でも腹いせにあんな真似をするのは感心しないな」

「は……？ 何の話だよ」

「ユウが嫉妬するのは可愛いし嬉しいけど、俺は君が他の男と

イチャつくのを笑って見ていられるほどお人好しじゃない。まあ、それは大した問題じゃないが」

「誰がイチャついたって……」

「さつき言わなかったか？ 俺は腹が立っている。ツアー最終日に体調不良を押して、珍しく飲みにつき合ったと思えば、なるほどコースケの誕生日か。そういえばそうだな。君は最近あいつを可愛がっている」

「だから何なんだ……今日はみんなで祝おうって言うただろうが」

ステージでそう言ったのはほかならぬショウ自身だ。ただのマイクパフォーマンスだったのかもしれないが、それでも実際に一緒にバーへやって来た。そして直後に女と消えた。その話は結局誤魔化されたままだが、それはいい。この男の女遊びは今に始まったことでもない。それよりも。ユウは段々と腹が立って我慢が出来なくなってきた。

「それは発熱を我慢してまですることか？ あいつが君に何を求めているか知らない振りをするのはやめろよ。どういうつもりで期待を持たせている？ それともいつか応えてやるつ

もりなのか？」

ユウはカツと顔を赤くした。本気で訊いているのか？

「冗談じゃない。なんでお前にそんなこと言われなきゃならな
いんだ。お前こそミキと……！」

不意に身体が転倒する。視界が暗くなり、突き飛ばされて脳
震盪を起こしたのだと、数秒遅れで気が付いた。

個室の板張りに側頭部を打ち付け、衝撃と眩暈を堪えながら
体制を整えようとしたが、今度は腕を捉えられ、背中をドアに
打ち付けられた。

「そういうお遊びを俺は我慢するつもりはない」

「どつちが……」

反論がふたたびキスに飲み込まれる。下唇を噛まれ、舌を吸われ、歯が当たるほど強く押し付けられる強烈なキスだ。

昨夜遅くにかかってきた電話で、シヨウは部屋を出て行った。着信の表示はミキだ。自分の目を盗んで二人がときどき会っていることをユウは知っている。仕事の話をしていると言われたら、それまでだが、それだけじゃない気がして仕方がない。心配は尽きない。問い詰めたいのにシヨウはそれを許さない。そ

して自分だけが責められる。

服を無造作に乱され肌が外気に晒された。シャツのボタンが千切られ、床や便器に落ちる音をユウは聞く。何をするのだと文句を言いたいが、そんな余裕はない。バックルを外され下着ごとデニムが腿までおりる。腰が丸出しになった。冗談じゃないと思っただけ抵抗しようとしたら、再び背中をトイレのドアへ強く打ち付けられて、狭いトイレに大きな音が反響した。

今度こそ文句を言ってやるつもりが、息が詰まって咳しか出て来ない。

「大人しくしてくれないか……」

怒気を含んだ声が鼓膜に響いてゾワリとする。

腰を抱えられ、指で荒っぽく穴をかき回される。

「んっ……」

粘質な音が漏れて男がフツと笑ったのがわかった。

「さすがに淫乱だな」

誰のせいだと言い返したくて泣きそうになった。ユウが感じ

やすくなっただとすれば、それは紛れもなくシヨウがそうさ

せた。後にも先にも、ユウはシヨウしか知らない。それはユウ

が墓場まで持って行くつもりでの絶対的な秘密だった。初体験はお互い酔った勢いの路地裏だ。今のように、そこでユウは乱暴に抱かれた。その後ホテルに連れ込まれ、傷ついた身体を滅茶苦茶に扱われて、気を失った。その酷い出来事が彼の初体験だ。

一応本人からは謝られたが、ユウは必死に平気を装った。それはユウのプライドであり、性分だった。辛いときに辛い、悲しいときに悲しいと言えない、損な性格だ。あれが初体験などと、口が裂けても言えはしない。相手の男にはなおさら。

背後から荒っぽく勃起を入れられ、すぐに身体を揺さぶられ

る。

「やつ……ああ……」

ツアー中、ユウとシヨウは夜が一緒だ。宿泊の部屋は個室を割り当てられているが、仕事や喧嘩でお互い行き来は密であり、流れで大抵セックスをする。性欲が強い男と、独占欲が強い自分がいれば、互いの要求がそこだけ一致する。

だが、鬱積した疑問や不満が、惚れた弱みでうやむやにされておき、ユウは男の不誠実さに苦しみ続けている。

「泣いているのかい……」

言われて自分が涙を流していることを知った。

「誰が……こんなもの、生理反応だ……」

負けず嫌いでそう言えば、上も下も泣いていると、下品で心無い皮肉を浴び、悔しくて声が出た。その直後にユウはあっけなくイカされた。

そして抜かないまま、器用に向きを変えられ、今度はタンクに手を突いて、後ろから突かれる。

そのとき、不意に大きなサウンドが耳を捉え、トイレのドアが開いたとわかった。

ユウは息を呑む。

「まじまじ。シヨウって超手早いよ！」

硬いヒールの音と甲高い女の声。

「えー、アンタ、そりゃあ行くでしょ。向かいの安いラブホだったけどね。あんなイケメンと出来るなら、どこだっていいっしょ」

女は誰かと携帯で喋っているようだった。そして会話内容から、それが来店直後にシヨウと消えた女であり、二人がどこで何をしていたかをユウに教えてくれた。

それは今更どうでもよい。問題はこのトイレが個室ひとつしかない、男女兼用の狭い仕様ということだ。もしも女がトイレを使うつもりで、出てくるのを待っているとすれば……その先は想像するだけで怖ろしい。無様なスキヤンダルだ。

「まさか本気にしてるの？」

耳元で小声が訊いてきた。息がかかり、ユウは背筋がまたゾクリとする。

「やめろ……気づかれる」

ユウも小声で返すが、声を抑えすぎてシヨウにも聞こえない

ようだった。もしくはは無視をされた。

身体の向きが違おう上、先ほどよりも音楽のボリュームが上がっている。フロアへ通じるドアが閉まっただけでも、床や壁の振動が凄い。状況の変化に今は感謝した。

「彼女は誰かに自慢したいだけさ。何もしてないよ。安心して」
耳に口を付けたままショウが低く囁く。

そんなこと、信じると思っただけなのか……そう言いたかったが、ユウは沈黙した。

女なんてどうでも良い。それよりも、ミキとは本当に終わっ

ているのか？ 疑惑だらけの男に遠慮をする価値は本当にあるのだろうか。自分がコースケを可愛がっていることに文句を言われる筋合いなどないじゃないか。

コースケとは今のところ本当に何もなし、シヨウに難癖を付けられる謂れもないが、コースケが時々アプローチをしていることにまったく気づいていないわけでもない。相手にしていないが、弟みたいな存在とは言え、コースケも男だ。

もしも雰囲気に流され、俺が誘いに乗ったとしたら……。

突然中を強く挟られる。

「んああっ……！」

思わず大きな声が出て、ユウは慌てて掌で口を押える。

「何を考えてるの？」

「何って……ああ、あああっ……！」

再び奥まで突かれ、今度こそ紛れもない嬌声が出た。

手を突いているタンクがガタンと揺れる。そういえば、電話の会話が先ほどから消えている。

女は出て行ったのだろうか、それとも……。

「ユウ」

名前をはつきりと呼ばれ、ユウは焦った。

「やめろ……聞こえ……やあつ、そこっ……」

「ユウ、ユウ……」

入り口、腹の裏、奥まった部分……これでもかと感じる場所ばかりを突かれ、ユウはもはや声がまったく我慢できなくなっていた。

そして彼を呼ぶシヨウの声も熱っぽさを帯び、二人とも室内にいるかも知れない女の存在など気にする余裕がなくなっていた。

「シヨウっ……す……き……」

堪らず思いを唇に乗せた瞬間、ユウは二度目の絶頂を迎え、続いてシヨウが余裕のない声を背後で聞かせた。

再び音楽が大きく聞こえる。

「リコちゃん、大変だよ！ ジンとミツキーが来た！」

「嘘っ！ やだ、ちよつとまだグロス塗りなおしてない」

「グロスなんてどうでも良いじゃない、早くしないとまたVI
Pに入られちゃうよ」

慌ただしく女が出て行ったらしいことがわかった。

同時に力をなくしたシヨウの物がユウの中から出ていく。

「女なんて、現金なもんだ」

「どこでグロスが取れたんだらうなあ」

背後で身繕いをしている男へ嫌味を言ってやると。

「さあ。ラーメンでも食べたんじゃないか？ それより、さっ

さとホテルに帰ったほうがいいぞ。やっぱり君、熱がある」

適当なことを言って男もトイレを出て行った。

「どの口が言うんだ、まったく」

内股を流れ落ちてくる、精液をペーパーで拭いながら、不誠実

極まらない男に一人で恨み言を零すと、言われた通りにその夜はすぐにホテルへ戻った。その日から三日間ユウは寝込んだ。